

令和2年度教育事業 夢冒険  
夏のチャレンジ



1. ねらい

- ① 日頃の生活ではできない体験や活動への挑戦を通して、達成感を得て、自己肯定感を高める。
- ② 早寝早起き、運動を通じた基本的な生活習慣の確立を図る。
- ③ 異年齢での集団生活を通して、仲間と協力する気持ちを育む。
- ④ 基礎体力の向上を図るとともに、自然の中で、生きるために必要な知識・技能を養い、主体的に考えて状況判断をし、危機管理できる能力を身につける。
- ⑤ 自然環境に意識を向け、自然に生かされている自分に気づく。

2. 実施日

令和2年8月15日(土)～8月22日(土) 7泊8日

3. 対象者

小学校5・6年生、中学生

4. 参加者 / 募集定員

18名 / 24名

5. プログラム (要約)

5年目を迎えた曾爾から伊勢まで「歩く」移動型キャンプ。曾爾から伊勢まで続く道を辿り、そこにある「自然」「人」「歴史」を五感で感じ、自分たちの「足」で仲間とともに様々な困難を乗り越えながら、約100kmの道のりを踏破した。曾爾青少年自然の家から三重県にある伊勢神宮を経由して、二見の海を最終目的地とした。「歩いて曾爾(山)から二見(海)を目指す」という大きな目標の達成に向け、新たな挑戦や仲間づくり、自分を見つめる等、その日ごとのねらいをしっかりと設定すると共に、歩く活動の他に野外調理など様々な体験活動を盛り込み、仲間と共に協力する場面、自分自身の力を発揮する機会を設けた。また、街道沿いに残る道標や灯籠、宿場町の街並みにも目を向け、お伊勢参りの歴史や意味について学ぶ機会を設け、歩くことを通して様々なことを考え感じることができるプログラムとした。

スケジュール

日	主なスケジュール	距離(約)
15日	★はじめましての日 国立曾爾青少年自然の家(集合) はじまりの会 班の目標設定 野外炊事(ちゃんこ鍋) 夢冒険TIME(目標発表) 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (奈良県宇陀郡曾爾村)	自然の家
	★集団からチームへの日 自然の家→伊勢奥津駅 夕食作り(カレーライス) 夢冒険TIME(自己紹介ゲーム) 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (奈良県宇陀郡曾爾村)	17km 自然の家
17日	★自分と戦う、チームで戦うの日 伊勢奥津駅→リバーサイド茶倉 伊勢本街道の難所(飼坂峠、仁柿峠)を踏破 夕食作り(麻婆茄子) 夢冒険TIME(家族への手紙) 【宿】リバーサイド茶倉 (三重県松阪市飯南町)	21km バンガロー
	★チームってなんだを考える日 リバーサイド茶倉→ふれあいの森勢山荘 夕食作り(ハンバーグ) 夢冒険TIME(友だちのキラリ) 【宿】ふれあいの森 勢山荘 (三重県多気郡多気町)	11km ロッジ・バンガロー
19日	★リフレッシュの日 勢山荘→五桂池ふるさと村 班で食材の買い物 夕食作り(夏野菜すき焼きなど) 【宿】五桂池ふるさと村 (三重県多気郡多気町)	8km バンガロー
	五桂池ふるさと村→伊勢神宮(外宮) →修養団 《夜間歩行》	21km
20日	★「いままでのすべてをここに」の日 修養団到着 内宮参拝 夕食作り(食事コンテスト) 夢冒険TIME 【宿】修養団伊勢青少年研修センター (伊勢市宇治今在家町)	3km 宿舎
	★海へラストチャレンジの日 修養団→二見奥玉神社 二見→自然の家(バスで移動) グループTIME(スタンプ練習) 夢冒険TIME(キャンドルファイアー) 【宿】国立曾爾青少年自然の家 (奈良県宇陀郡曾爾村)	12km 自然の家
22日	★ふりかえりの日 道具の片付け グループTIME(振り返り・冬までにかんばること) 夏のチャレンジ終わりの会 解散	
冬の「夢冒険」へつづく		

## 8月15日(土)【1日目】

奈良、大阪、三重から、小学生12名、中学生6名の計18名が曽爾青少年自然の家に集まった。不安と期待を胸に、7泊8日共に活動を行う異年齢男女混合の1班4～5名の4班構成で、「夢冒険」夏のチャレンジがスタートした。

午前中に開会式、オリエンテーションなどを行い、午後から本格的な活動が始まった。

一日の終わりに行う「夢冒険TIME」まで、できるだけ班で時間を過ごす。班で相談しながら生活を行う。また、起床時間や朝食の時間も「出発のつどい」の時間から逆算して、班で相談して決める。参加者が、自分たちで考えて、自主的・主体的に活動することを大切にしたい。また、職員やボランティアは、参加者が知らないことや初めて行うことは、丁寧に説明をして指導をするが、参加者ができることは、全て班で相談して活動のサポートをすることに徹した。



今回のキャンプ実施においては、コロナ対策が重要な生活スキルとなった。これについても参加者が自主的に動けるよう、看護師からレクチャーしたうえで、個別に消毒液を持つよう工夫をした。

またあわせて、歩く行程を地図で確認したり、長時間歩くコツ、休憩の取り方や水分補給、栄養補給の心得を学んだりした。

## 8月16日(日)【2日目】

子どもたちの司会・進行による「出発のつどい」を行い、いよいよスタート。全員の顔に、「よし、がんばろぞ」という気持ちが表れていた。



御杖村に入ると、伊勢本街道の様相はますます濃くなり、道標や灯籠・お地藏さんなどが見られた。

時刻が進むにつれ、気温がどんどん上昇。この先の旅を象徴するような暑さが子どもたちを襲う。「あの日陰で休憩をとろう」「駅まで残り2km」とみんなで声を掛け合い、励まし合って伊勢奥津駅に到着した。班によっては、翌日の距離を減らすため、もう少し先まで歩みを進めたところもあった。



## 8月17日(月)【3日目】

まだ月が煌々と輝く真夜中3時、自分たちでセットした目覚まし時計で起き、準備を始める。暑さ対策のために早めの出発。出発のつどいに全員が遅れずに集合した。「時間を守る」のも、この旅では重要な約束ごとである。

つどいでは、「みんなでがんばって全行程を歩き切りたいです」「班のみんなといっぱい話して楽しく歩きたいです」などと、自分の目標を発表した。

8日間の日程でこの日が一番長い距離を歩く。しかも難所の峠を2つ越える。子どもたちの顔も「よし、やるぞ!」「がんばろぞ!」と気合いに満ちていた。どの班も午前中の比較的涼しい時間帯に距離を稼ぐことを目標に歩き始めた。歩く速さや並び方、休憩の取り方については中学生のリーダーが中心となって班で相談をして決めていた。



疲れてきたら歌を歌い、ゲームをし、クイズを出し合ったりして気持ちを紛らわせて2～3km先の休憩ポイントを目標にして歩いた。飼坂峠は、伊勢本街道の難所の一つで、けっこうな山道である。距

離だけでなく、標高差も負担がかかる。まずは自分との戦い、そして班でお互いにコミュニケーションを取りながら雰囲気を作って歩みを進める。これこそが移動キャンプの大切なポイントとなる。お互いに支え合いながら、リバーサイド茶倉に到着することができた。

残念ながら、一部の班は暑さのためにディレクター判断で12時に活動をストップし車両で搬送した。コンディションをどう保つかも難しいキャンプとなった。



ポイントをひとつ超えたところで、家族への手紙を書いた。「楽しくやっています」「今日、全行程を歩いたよ」「1kmって歩くと長いんだ」などと、近況を報告したり、「お土産を買って帰る」と書き、家族のことを思いながら、ふりかえる時間となった。

### 8月18日(火)【4日目】

この日は比較的ゆっくりなスタート。朝食をとり、班で他愛もない話をしながら食卓を囲む。ゆっくりとした時間を過ごした。

前日、切り上げられた距離を少しでも挽回したいと早めに出発する班もあり、班ごとの雰囲気も現れてくるようになった。



この日も暑くなった。前日の距離に比べ、「たった1km」という声もあったが、時間が進むにつれて暑さが襲い掛かる。なんとか「先へ」という気持ちで歩き続けた。



コロナ対策が重要と意識して進めていたが、参加者の前に大きく立ちはだかるのは暑さだった。峠を越えると一気に気温が上がり、その温度差(湿度も)がこたえた。日を追うごとにリーダー達にも疲労感が見えるようになる。班の中でも様々な課題がある。この状況をどうしのいでいくかが、まさに夢冒険なのだと言い聞かせながら行程が進んでいく。

### 8月19日(水)【5日目】

夢冒険も後半戦に突入。早起きの子どもたちは午前6時頃から活動を始めた。

5日目は、班を一度解体し、同学年で歩く編成に変更。心身共にリフレッシュすることをねらいに据えた。

中学生班と男子小学生班、女子小学生班に分かれて歩いた。中学生にとって、班の運営に関する悩みを出し合ったり、情報交換したりする良い機会となった。また同学年の友だちとたくさん話をするにより気持ちをリフレッシュしたようだ。前の晩から自主的に始まった中学生ミーティングが、夢冒険の後半の活動に大きく生きてきたように思った。



早めの夕食を終え、夜間歩行に備えて早めに床に就いた。

### 8月20日(木)【6日目】

起床午前0時。寝具を片づけ、荷物の整理をして、広場に集合した。午前1時、真夜中の中の出発のつどい。頭にはヘッドライトを装着。疲労は見えるが、気合

いは十分。司会の「がんばって伊勢まで歩くぞー」の掛け声のもと、全員が元気に出発した。



真っ暗な田舎道を歩く。カエルの合唱と虫の声が聞こえてくる。

「夜って涼しいな」「夜中に歩くの初めて」歩くペースも良い。約1時間に1回の休憩を取りながら順調に進んだ。夜間の休憩場所は、必然的にコンビニとなった。トイレ休憩だけでなく、必要に応じて、各自で行動食や朝食を購入した。

4時過ぎからだんだん空が明るくなり始める。交通量も増えてきた。「あと少しでコンビニがあるからもう少しがんばろう」。コンビニでトイレを済ませ、水分補給と栄養補給。次は「3.3km先だね」と新たな目標を決めて、また出発。



宮川を渡ると伊勢市街に入る。気温も上がってきた。

伊勢神宮の案内標識も増え、商店など町の賑わいも増し伊勢神宮の雰囲気の色濃くなる。大きな森が現れ、外宮（1.7km付近）に到着。まだ、境内は観光客も少なく、朝の優しい光が差し込みひっそりとした雰囲気。参加者は、無事に到着できたことに対する感謝の想いで外宮を参拝した。



この日のゴールの修養団までは、外宮からは4km弱。しかし太陽の光も強くなり、気温は、どんどん上昇する。ラスト4kmは、この暑さが大きな壁となった。

結果、ディレクター判断で、8時30分にストップとした。

密になる場所を避けるため、おかげ横丁へは行けなかったが、各班とも休憩後は内宮に参拝し旅の無事を報告した。



このころになると料理は手慣れたもので、言われたとおりにメニューを作ることはほぼない。夕食は、「食事コンテスト」と題して、自分たちで（代表者1名がスーパーに行き）、購入した食材でどんなメニューを考えて作ることができるかというプログラムにした。

どの班も手際よくあっという間に料理は完成した。どの班も工夫されていて本当においしく、鍋で炊くご飯の味も素晴らしかった。

## 8月21日（金）【7日目】

いよいよ最終目的地である二見海岸の海を目指す。残り1.2kmである。

出発のつどいを行い、施設の方にお礼を言い出発。



夜はキャンプファイアーを行った。班の出し物として、クイズやゲーム、歌、ダンスなどが発表されてとても盛り上がり、各班の結束も感じられた。夜遅くまで名残惜しく仲間との交流が進んだ。



和気あいあいと、夜のキャンプファイアーの相談をしたりする班もあれば、道が見つけられずに地図とにらめっこする班もあり。なんとなく潮の香りがする。海が近づいていることを実感しながら、歩みを進める。

「もうすぐゴールだ」海が見えてくるともう走りたい衝動にかられる。



### 8月22日(土)【8日目】

全員が元気に最終日の朝を迎えた。

午前中は、一週間利用してきた寝袋を干したり、鍋や食器などの道具を片付けながら活動をふりかえった。がんばれたこと、がんばれなかったこと、冬に向けてさらにがんばりたいことを仲間と語り合った。



笑みを浮かべ喜びを噛みしめながら、一步一步ゴールへ向かった。

先頭の班が二見興玉神社に到着、後続の班も次々にゴールした。全員が、全行程を終えることができた。自然の家へ向かう帰りのバスの中では、ほぼ全員が熟睡していた。



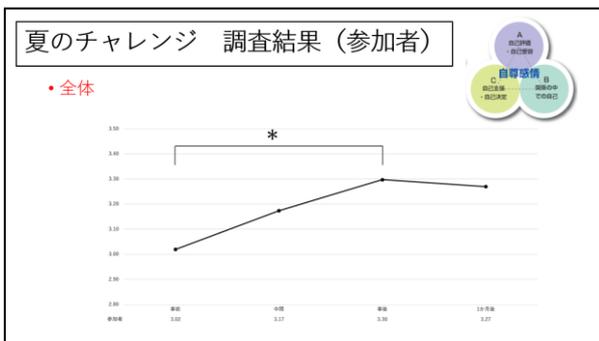
終わりの会では、一人ひとりが冬に向けての宣言をした。そして、真冬にチャレンジまで、それぞれの場所で目標を持って過ごし、さらに成長した姿で再会することを約束して別れた。



ある。期間を通して徐々に高まっていったということはそれぞれのグループが良く機能していたといえる。リーダーの参加者に対するサポートも効果的であったし、リーダー自身もうまくかかわっていたといえる。

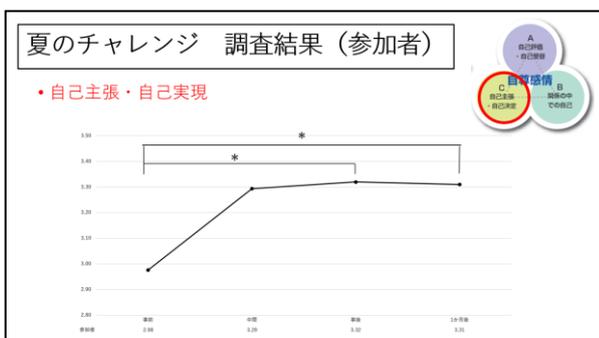
- 自分とちがう意見とかイラっとすることがあってもできるだけおさえた。(中学生男子)
- 子どもが自分で気づけるような声かけ。子どもが打ち解けられるような接し方。リーダーの相談に乗る。(女性リーダー)
- 何をするかわからない子への声かけ。中学生への精神的ケア。夢冒険での行動すべてです。(女性リーダー)

## 6. 調査結果



この夢冒険を通して参加者およびリーダーの「自尊感情」がどのように変化していくかを調査した。その結果、期間中を通して高まり、その効果は1か月後まで高く維持された。

- これまでみんなの手伝いができなくてひっぱってもらってばかりだったけど、今年はできたこと。(小学生男子)
- 今まで自分が参加してきたのとはまったく違った成長をした気がする。今まで夢冒険に参加してきたのが今回の夢冒険に役立っていると思う(女性リーダー)



そのうち、「自己主張・自己実現」が特に有意な結果となった。小グループでの活動がほとんどのなかで、「自分自身をしっかり主張しながら関係性を構築できる」が、良いグループづくりのポイントでも

## 7. まとめ

コロナウイルス感染拡大により、中止になる可能性も大いにあったが、子どもたちやリーダーの夢冒険への想いを大切にし、どのような方法でなら実施できるかを探ったうえで実施した。途中も、暑さによる中断の判断をする機会が何度かあった。大きな事故や病気もなく達成できたのは、子どもたちの頑張り、リーダーの意識の高さに尽きる。

「自分も高校生になったらボランティアになりたい」(中学1年生女子)、「ゴールできてよかった。自信がついた。」(小学生男子)

目の前のことに必死だったが、時間がたって思えば、8日間のキャンプを通して、自分や仲間と真剣に取り組んだと思えるはず。大いに自信をつけてほしい。そして夢冒険は冬に続いていく。

(企画指導専門職 高瀬 宏樹)

令和2年度教育事業 夢冒険  
冬のチャレンジ



1. ねらい

- ① 日頃の生活ではできない体験や活動への挑戦を通して、達成感を得て、自己肯定感を高める。
- ② 早寝早起き、運動を通じた基本的な生活習慣の確立を図る。
- ③ 異年齢での集団生活を通して、仲間と協力する気持ちを育む。
- ④ 基礎体力の向上を図るとともに、自然の中で、生きるために必要な知識・技能を養い、主体的に考えて状況判断をし、危機管理できる能力を身につける。
- ⑤ 自然環境に意識を向け、自然に生かされている自分に気づく。

2. 実施日

令和3年1月9日(土)～11日(月・祝) 2泊3日

3. 対象者

小学校5・6年生、中学生

4. 参加者 / 当初人数

16名 / 18名

5. プログラム (要約)

夏の7泊8日の伊勢まで「歩く」移動型キャンプを実施した後、同じグループの仲間と再会し、この間のできごとを報告し合い、新たなチャレンジに取り組む機会とした。三峰山への冬山登山をメインの活動とした。新たな挑戦や仲間づくり、自分を見つめる等、その日ごとのねらいをしっかりと設定すると共に、キャンプの経験を今後活かしていくために、このキャンプ後の自分自身を思い描く時間を多くとった。

スケジュール

9日(土)	はじまりの会 グループミーティング 班対抗アウトドアゲーム大会 ソロ(一人用)テント泊
10日(日)	三峰山登山 グループミーティング キャンドルファイアー
11日 (月・祝)	かたづけの時間 ふりかえり&これからを考える時間 終わりの会

1月9日(土)【1日目】

4か月ぶりの再会。体調不良や都合で来られなかった2名を除いた16名が曾爾青少年自然の家に集まった。「元気だった?」という声が飛び交い、再会を喜ぶ参加者たち。

はじまりの会、オリエンテーションなどを行い、班ミーティングから本格的な活動が始まった。



はじめのうちこそぎちなさがあったものの、活動が始まってみると、夏の頃の家族的な雰囲気にあっという間に戻っていく。ゲーム大会を終えるころにはもう元通りになっていた。

冬山登山の注意点を聞き、翌日の登山と夜のソロテント泊の準備を整える。天候の厳しさから室内でのテント泊になったものの、参加者どうしの会話に耳を傾けると、前向きにチャレンジしようとする発言が多くあり、とても頼もしく思えた。



### 1月10日(日)【2日目】

テントの片づけ、朝食を手早く進め、三峰山登山へ出発。



雪が多く、登山道に入っすぐにアイゼン（スパイク）を装着。一步一步を踏みしめながら山頂への歩みを進めていく。あまり見る事のない、氷と雪の世界に心を躍らせながら、夏のように「しりとり」や「クイズ」など他愛のない会話が飛び交い登山は進んだ。



しばらくして三峰山山頂に到着。「本格的な雪山ははじめて」、「雪遊びができて楽しかった」等、風は強かったけれども、たくさんの雪に心を躍らせている参加者が多かった。「なかなか体験できないことだね」と自分たちがとてもすごいことを成し遂げたという感想もあった。

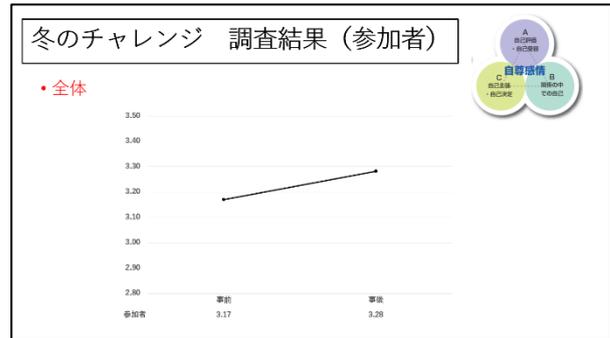
夜は、キャンドルファイア。各班で起きた出来事をスタンツ（寸劇）にして発表した。どこの班もそれぞれの持ち味を生かして発表。仲間と過ごす最後の夜になったこの日、ふりかえりの時間になったように思う。

### 1月11日(月・祝)【3日目】

終わりの会では、一人ひとりが自分の将来に向けての宣言をした。それぞれの夢を実現できるようエールを送り、これから続くそれぞれの夢・冒険に期待していきたい。



## 6. まとめ



冬のプログラムも新型コロナウイルスの感染拡大により、中止になる可能性も大いにあったが、さまざまな対策のもとに実施した。

「大きくなったらボランティアになりたい」という参加者の声が多かったのは、まさにロールモデルとなるボランティアの姿にふれてのことだろう。ボランティアもその声を聞いてまた、やりがいを感じたはず。

コロナ禍で地域や学校の中での人とのかかわりが作りにくい一年だったと思われる。夢冒険のできごとや深いかかわりは、参加者にとって生涯かけがえのない経験になるに違いない。活動を通して良い社会人を育成し、社会に輩出していくという地域の中での自然の家の役割を改めて参加者に認識させてもらったように思う。

(企画指導専門職 高瀬 宏樹)